

近代粵語の母音推移と表記

高田時雄

はじめに

近代粵語が今日の姿になるまでには、いささかの變化を經ている。次の些細な事柄もその見やすい例の一つである。ブリッジマンのクレストマシー [Bridgman 1839] に、英語の Mister [mistər] を廣東では「美士」(嘔吐)とすることが書かれてある。この言い方はいずれピジンのたぐいであり、したがって第二音節が無いということはいま問わないことにしよう。ただ「美士」が最初の Mis の部分のみを寫したものだ考えると、現代粵語では「美士」は [mei si] と讀まれてしまい、うまく音が合わない。おそらく十九世紀前半にはこの二文字で表わされた語は [mi sɿ] 乃至はそれに近い音で讀まれていたものであろう。それでこそ Mister に「美士」を當てることが出来たのである。しかし [mi] [mei]、[sɿ] [si] の變化は、孤立的に生じたのではなく、もちろん體系的な母音推移の一環であった。つまり十九世紀から現代に至るまでのあいだに、粵語の母音は [i] [ei]、[ɿ] [i] の變化を經たと考えられる。この變化を音節ごとに類別して見ると、以下のようになる。

(I) pi 碑, p'i 皮, fi 非, mi 眉, ti 地, ni 尼, li 離, ki 幾, k'i 其, hi 希 pei, p'ei, fei, mei, tei, nei, lei, kei, k'ei, hei

(II) 但し i 衣, tʃi 知, t'ʃi 癡, ʃi 詩 は變化せず

(III) tsɿ 資・滓, ts'ɿ 次・廁, sɿ 思・師 tsi, ts'i, si

つまり (I) 類は止攝開口の唇・舌・牙喉音字、(II) 類は同じくゼロ聲母(影・喻・疑・日)と齒音三等字、(III) 類は齒頭音字(中古の齒頭音と正齒音二等、すなわち精組と莊組を含む)となる。歐米人が前世紀以來粵語について書いた文獻を順次見ていく限り、この變化はきわめて明らかなように思われる。例えばウィリアムスの辭書 [Williams 1856] の表記を見ると、(I)(II) 類がともに -i で書かれる一方、(III) 類が tsz', ts'z', sz' と書かれて、上記の變化以前の狀態を反映している。しかしこの點に関しては資料の性格にかかわる種の混亂があつて、必ずしも意見の一致を見ているわけではない。そこで小文ではこの混亂を解きほぐして、上記の母音推移が實際に起こつたことを明らかにしてみたいと思う。

『分韻撮要』という韻書

閩語の『十五音』とならんで、粵語には『分韻撮要』という韻書が存在した。それを基礎としたのがウィリアムスの『英華分韻撮要』 [Williams 1856] である¹。ウィリアムスの辭書とその表記法とは後世への影響がきわめて大きく、のちの大型辭書、たとえばロブシャイト [Lobscheid 1866-69] やアイテル [Eitel 1877] など基本的にはウィリアムスの表記を踏襲している。しかし肝腎の『分韻撮要』は今日では、決して見やすい書物とはいえない。そのためにこの書についてあれこれ言われて

¹同じく『分韻撮要』を用いたものに [Chalmers 1855] があるが、これは部首順に文字を列べ、各文字に對し聲韻母を代表する二字によって音注を施すシステムをとる。そして毎葉の上欄に場所を設けて各聲韻母にアルファベットの表記を與えてある。音を求めるのに繁雜な嫌いがあり、ウィリアムスの辭書ほどには行われなかつたようだ。

いるところを確認することが困難で、それが混乱の発端にもなっている。ウィリアムスは [Williams 1856] の序論において本書について觸れ、以下のように述べる。

廣東方言の發音の基準となっているのは小さな十二折のハンドブックで、時には單行されることもあるが、賣れ筋を考慮して、よりしばしば書簡文例集のようなものと一緒にして刊行され、『江湖尺牘分韻撮要合集』と呼ばれている。……この小字典はふつつう薄い四冊からなり、二十五セントで賣られている²。

同様の説明は [Bridgman 1839] にもすでに見られる。

分韻とは文字どおりには韻を分けることだが、實は書物である。一冊あるいは二冊になっていることもあるが、より普通には四冊の薄い冊子である。最初のページから最後まで二つの書物が一緒になっている。一つは手紙文例集で、各ページの上半分を占め、他方がここに述べた書物である³。

さらに [Williams 1842] にも、

この方言の權威は『分韻』という四冊本の小韻書で、七千字以上の常用字が發音順に配列されている。それらの文字は韻母にしたがって三十三類に分けられている⁴。

筆者が実際に見ることの出来たのは、道光五年（1825）一經堂刊（封面による）の『江湖尺牘分韻撮要合集』⁵および刊年不詳、五雲樓梓行の『分韻撮要』單行本⁶の二種であり、まさにそれぞれがウィリアムスのいう合綴本及び單行本に当たる。[Williams 1856] はさらに合綴本の序文を英譯して掲げたあと、その年號を 1782 年とするが、これは乾隆四十七年である。不思議なのは、英譯を見るかぎり、その序文がフランス國立圖書館本と同じであることである。同一の序文に對して二つの年號が記されているというのは何とも奇妙であるが、おそらくは道光五年刊本が先行する本の序文をそのまま襲ったものであろう⁷。ともあれウィリアムスの見た本が確かに乾隆四十七年刊本であったとすれば、この本自身がすでに合綴本であるのだから、單行本の『分韻撮要』の刊行はさらに時代を溯ることになる。この點は『分韻撮要』の音系を考える上で重要であり、先ず銘記しておくべき事柄であらう。

次に編者について考えねばならない。單行本、合綴本ともにその卷首に「武溪温儀鳳岐山甫編輯」とある⁸。武溪は一般には湖南省辰州府下の瀘溪の一名として知られているが、粵語韻書編纂者の出身地としてはいかにも似つかわしくない。武溪はおそらく韶州府屬の樂昌縣を指すものであろう。樂昌縣城はその西側を武水が北から南に流れ、それにちなんで武溪とも稱する。後漢の將軍馬援が南征した時の作として傳わる「武溪深」詩は、これも武陵の五溪蠻征討時のものと考えるのが普通であり、だとすれば湖南の武溪を詠んだものとなるはずであるが、樂昌ではまさに自分たちの土地を詠んだものと考えられているらしい⁹。武溪が一種の雅稱として樂昌人に用いられたとしても奇異ではない。

さて [李 1994] には「粵方言の研究で比較的早いものとして、順徳の人周冠山の作った『分韻撮要』がある。この書物はほぼ二百年前に書かれ、今見られる最も早い本は清の乾隆壬寅年（1782

²[Williams 1856] Introduction, p.xi.

³[Bridgman 1839] Chapter I, Study of Chinese（習唐話篇一）, section first, Exercises in Conversation（習言第一章）の「分韻」に對する註。

⁴[Williams 1842]、p.51.

⁵フランス國立圖書館所藏、Chinois 3926.

⁶大英圖書館所藏、Add.15346.a.6

⁷道光五年本の序文末尾には「道光四年之夏花港主人書於羊城惠愛精舍」とあり、刊行の一年前になっている。

⁸合綴本の封面に「武溪温岐石」とするのは明らかに誤りである。

⁹同治十年刊『樂昌縣志』卷十一藝文下。詩に曰く「滔々武溪一何深、鳥飛不渡、獸不敢臨、嗟哉武溪何毒淫。」

年)に刊行された」とある。注目すべきは乾隆壬寅年(1782)の年號が、ウィリアムスの見た温岐山の『江湖尺牘分韻撮要合集』の刊年と完全に一致する点である。そして李新魁氏はそれが順徳の周冠山の手になる『分韻撮要』だというのである。両者のあいだに見られる編者の不一致は何に由来するものであろうか。思うに、初めて周冠山の『分韻撮要』に言及したのは、現代粵方言の正確な記述として定評のある[黄 1941]である。その書の緒言に、粵音の標準を論じて「粵音で作られた韻書として順徳の周冠山の『分韻撮要』(出版年月未詳)がある。現在、坊間どこでも買える。しかしこの書はおそらく南海順徳あたりの方音によって編まれたもので、廣州で最も通用している音を代表することは出来ない」という¹⁰。[香坂 1952]にもまた「『分韻撮要』は何時頃出版されたものかは、全く明らかではないが、順徳の周冠山という人に依って著はされた事は、現在香港や廣州市の坊間で賣っている同書に、何れもこの著者名がついている点からも、明らかにされるのであるが、出版年代は一八五〇年代、或はそれ以前であった事も、William (sic) が利用した事實に依って推定できるのである」とある¹¹。黄氏や香坂氏の見た『分韻撮要』すなわち今世紀の三、四十年代に廣東で行われていた本には、最早温岐山の名を挙げず、編者として周冠山の名を冠していたことが分かる。かつては「坊間どこでも買える」ほどに廣く行われていたものでありながら、今日では世上から完全に姿を消し、図書館等でも所蔵されていないために、その書の如何なるものであるかを検証できないのは残念である¹²。しかしながら黄氏の引く五十韻(入聲を平聲に算入すると三十三韻)の分部を見る限り、周冠山の『分韻撮要』の内容は温岐山のものと同じものと考えて良さそうである。とすれば、有る時期に出版書肆によって編者の名前がすり替えられ、やがて元の温岐山本は行われなくなってしまったものに違いない。李新魁氏の目にした本もおそらく周冠山本であったのに違いない。同氏がその最古の本を乾隆壬寅年(1782年)とするのは、編者の相違を深く考えないままに、ウィリアムスの説に據ったための誤りと思われる。ともあれ、もし編者周冠山の出自が順徳であるという事実が、『分韻撮要』順徳音説の根據の少なくとも一つになっているとすれば、この際、この韻書がもとは武溪の温岐山編として行われていたことを確認しておく必要がある。

『分韻撮要』順徳音説

では『分韻撮要』において、最初に挙げた止攝開口字がどのように扱われているかといえば、先ず(I)(II)類が同じ第三幾紀記韻に屬し、(III)類は獨立して第十六師史四韻を作っている。現代粵語ではこれらが同一の韻母になってしまっているのは見たとおりである。[黄 1941]が『分韻撮要』を批判して、まず「幾紀記の韻には詩・知・衣・始・倚・市・志・試・異などの字音が混入しているが、これでは[eɪ]と[i]が混じっていることになる」というのは¹³、もちろん順徳音説の根據の一つである。順徳では[i] [eɪ]の母音推移が進行しておらず、廣州の[eɪ]と[i]が同居していても怪しむに足りないからである。黄氏はまた「師史四の韻は舌尖母音の韻母[ɹ]で、これは廣州ではあまり行われぬ。廣州人は[i]に讀むものが多く、したがって『分韻』の幾紀記韻と混同する」という¹⁴。順徳では師史四韻は圓唇化した[y]に讀まれるので、ここに韻母[ɹ]を想定すると、實は順徳音説には都合が悪いのだが、黄氏は廣州音と異なる例として取り上げているのである。黄氏は全部で十項目の廣州音に合わない点を列挙しているが、これらすべてが必ずしも順徳音説で説明が

¹⁰[黄 1941] 緒言 pp.2-3.

¹¹[香坂 1952]p.50.

¹²『日本現存粵語研究書目』(天理大學中國語學科研究室編、1952年11月)に、周冠山『分韻撮要』五桂堂を著録し、天理大學と大阪市立大學に所蔵するを報告してあるが、今日その所在を明らかにし難い。

¹³[黄 1941] p.3.

¹⁴[黄 1941] p.4.

つくものではない。反対に、細かく『分韻』を見ていくと、もし順徳音であったとすれば合わない点が多いのである。一、二例を挙げてみよう。第二十七官管貫括韻の去聲「玩」小韻には「玩翫緩煥煥換奐」諸字を収めてあるが、順徳音では玩翫が [wun]、緩煥煥換奐が [fun] となって、順徳音に據ったとすれば本来分けられていなければならない。廣州音であれば兩者ともに [wun] であるから、この合併は理解しやすい。また第十三鴛婉怨乙韻の平聲では「喧誼諷喧咍烜萱捲圈墳儼燠」と「玄泫眩術員圓巾員園園緣袁輓猿完鳶沿鉛懸縣」とが別の小韻を構成している。前者が [hyn]、後者が [jyn] であるが、順徳では後者の多くが [hyn] と讀まれ、この二小韻は合わさってよいはずであるが、そうはなっていない。『分韻撮要』が順徳音に據って作られたとするのには無理があるというべきであろう。上に見たように『分韻撮要』の成立は十八世紀（遅くとも 1782 年以前）にまでさかのぼるわけで、それを今日の音と比較して論ずるのは如何かと思う。止攝の扱いに関して言えば、順徳などの方言は保守的なものであり、『分韻撮要』がより古い段階の粵語音を反映しているものとすれば、それが一致するのはきわめて自然である。

ウィリアムスが『分韻撮要』を基礎として、その辭書を編んだのには、これが當時の廣東で發音の規範とされていたからである¹⁵。もちろん韻書は保守的なものであり、實際の音變化に追いつかない側面も常に存在する。ウィリアムスの時代、『分韻撮要』はまだ規範として十分に機能していたが、しかしすでに今日の母音推移の萌しは現れていないわけではなかった。第三幾紀記韻の説明としてウィリアムスは言う：

Kíは me, flee のように [發音する]。k, p, f で始まる若干の語は、しばしば第二十韻（二十九遮者蔗韻の誤り 筆者）のように聞こえる。例えば kí騎、pí俾、fí非、kí己が ké, pé, fé, ké となるように。しかしこれは例外である¹⁶。

變化の (I) はすでに十九世紀の半ばには現れていたが、まだ例外的なものであった。

ウィリアムスの表記とその批判

しかし (I) の變化は着實に進行し、時とともに誰の目にも確實に捉えられるようになってくる。しかし先行する記述に相違点を見いだしたとき、それを音韻變化のためであるとは考えず、いきなり誤りとして斷罪する傾向があるのは致し方ないことであろうか。『分韻』に依據して一世を風靡したウィリアムスの辭書ではあるが、その誤りを鋭く指摘する人々が歐米學者の間からも現れた。パーカーおよびボールの批判がそれである。パーカーは言う：

廣東語で本當に短い e が現れる場所は複母音 ei においてである。feint における如きで、それは Sir Thomas Wade の tei, pei 等とまさに同一である。この音はアプリアの原則にしたがい、ウィリアムスによって無視され、英語の thee のような í と書かれている。こんな音は mi, ni といった一二の口語語彙（乜、呢を指す 筆者）にのみ存在するものなのである¹⁷。

Thomas Wade は言わずと知れた最初の北京語學習書『語言自邇集』（その初版は 1867 年に現れた）を著した人物で、tei, pei は北京語音のそれを指す。パーカーの考えでは、歐米人の中國語研究は、

¹⁵[Williams 1844] Introduction, p.vii. 「廣東方言は廣州市で話されるものが最も純粹なもので、その發音の基準は『分韻』に採用された同音字の分類方式である。」

¹⁶[Williams 1856] Introduction, p.xvi. [Bridgman 1839] にも同様の説明がある：「第一韻（先蘇線屑）と同じ母音であるが、幾つかの語では例外的に長い í 母音が第二十九韻の母音 é に近くなり、may, pay, say のように發音されることがある」(Introduction, p.viii)

¹⁷[Parker 1880] p.364.

現地の理論を受け入れた上で、それを現實に合わせようとするアプリアリ的手法と、現實から出發する歸納的（アポステリオリ）な方法とがあり、前者の代表がウィリアムスなら、後者の代表がウェイドだというわけである。確かにウィリアムスが『分韻撮要』に依據したという事實はそのとおりである。言語研究において歸納的、實證的な方法が優先されるべきだという主張も當然であろう。しかしウィリアムスの表記には彼なりの基づくところがあったのであり、歴史的資料としての價値を抹殺すべきではない。

一方、ボールは香港政廳に長く勤務し、中國の諸方言の優れた話し手として定評のあった人物である。特に廣東語については數多くの教本類を出版したことで知られている¹⁸。彼は言う：

アイテル博士がその新しい辭書 [Eitel 1877] において、純粹な廣東語のよき話し手を模範とせず、ウィリアムス博士と同じ過ちを犯してしまったのは、かえすがえすも残念である。その過ちの理由は知らず知らずのうちに中國の著者の發音の理念を受け入れてしまったということもあるが、それは古い時代ならいざ知らず、現代では許されないであろう¹⁹。

續けて上のパーカーの語を引用しながら、正書法の變更についての論據としている。

いずれにせよ (I) の變化については、この時期から歐米人の著作中に反映されるようになり、(II) 類と異なる音形で表記されるようになる。しかし (III) 類はまだ相変わらず舌尖母音を示す表記 (tsz, ts'z, sz: Parker, Ball と同じ) が普通に行われており、現代粵語音への變化は完成していない。今日でもなお一部で使用されている Standard Romanization (及びそれと同じ Meyer-Wempe 方式) でもこの (III) 類は同じように tsz, ts'z, sz を用いているのは注目される²⁰。(I) の變化と (III) の變化では明らかに時代の前後のあることがわかる。

十九世紀粵語音の實態

これまで主として『分韻撮要』およびそれに據ったウィリアムスの表記を通して、(I) の變化を見てきたのであるが、ウィリアムスの表記は、實態を無視し中國の韻書の枠組みに人工的な音を宛てただけではないかという見解も相変わらずあり得るであろう。そのためにまず表記が如實に音變化を反映していることを納得していただくために、十九世紀以來の代表的な表記を表にしておこう。これによって (I)(II)(III) 各類の扱いの變遷が一目瞭然となる筈である。まずヨーロッパ人最初の廣東語記述者モリソンの表記を擧げる。その表記についてはあとで觸れる機会がある。[Chalmers 1855] はモリソンの影響が大きく、止攝の表記に関する限り同じであるため、ここには出さなかった。[Legge 1941] の表記は [Bridgman 1839] に據っている。その [Bridgman 1839] の編集出版にはウィリアムスの關與が大きく、後の [Williams 1842] [Williams 1856] とも同一表記で、全體としてウィリアムスのものと考えてよい。この表記が [Eitel 1877][Lobscheid 1866-69] に採用されたことは既に觸れた。ついで前世紀の末から今世紀の初めにかけてきわめて影響の大きかったボールの表記を擧げる。ボールも基本的にはウィリアムスの表記を襲っているのだが、上に見たとおり當時の音韻状態に合わせて訂正を加えている。そして最後に現代粵語の状態を反映するものとして [黄 1941] を出して置く。さらにまったく別種で當時の音を瞥見し得るものがあれば、それを見ておくに越したことはない。

¹⁸この人物とその評價については [Fok 1990] p.4ff. に詳しい。

¹⁹[Ball 1904] Introduction, p. xv.

²⁰Standard Alphabet は 1888 年、華南のプロテスタント傳道團によって採擇されたもので、その後何らの變更なく用いられている。[Cowles 1990] Introduction, v. Meyer-Wempe はカトリックの Maryknoll Society に屬するが同じシステムを採用している。

	Morrison	Williams	Ball	黄
(I)	幾 ke	幾 kí	幾 k'í	幾 gei
(II)	知 che	知 chí	知 chí	知 dzi
(III)	資 tsze	資 tsz'	資 tsz	資 dzi

表 1: 表記の変遷

[Ahock 1823-25] はモリソン譯新譯聖書のドイツ語譯稿本であるが、すべての漢字の下にアルファベットによるドイツ式の表音が付けられているので、当時の廣東音を探る資料となる。現存するのは第六本で、ローマ書からコリント後書までの部分である。音はカントン（廣州）出身の Ahock によるものだと巻末に注記される。1823-25 年の間に書かれたといえば、モリソンの辭書すらまだ現れていない段階であるから、既存の表記法を踏襲したものとは考えられない。また使用された表記法もドイツ語式の獨特のものであって、Ahock 自身によるコンヴェンショナルな轉寫であったと思われる。そこでも (I) 類は、既己 gi、欺 hi、非 fi、地 di、利理 ni,ri のように -i で寫すものが多く、(II) 類の知智之指旨 dsi、示時 ssi などと同じ扱いを受けている。すわなち變化は起こっていないと考えられるのである。(I)(II) 類ともに -e で寫されているような例もあるが、-i との區別を見いだせない。これも [i] 音を寫したものと見るべきであろう²¹。

時代は若干下るが、Ahock の表記と同様に中國人による別の表記がある。[唐 1862] は中國における初期英語學書の一つだが²²、類書中でも最も完備したもので、外國人の中國語（廣東語）學習も考慮したのであろう、漢語語彙にもアルファベットによる音を付けてある。それを見るとこれもやはり同様の扱いであることが分かる。少し例を挙げると、(I) 己 ke、基 kee、旗 kí、器 hí、鼻脾 pe、皮 p'he、尾 mí、利 lí、(II) 指 che、時市 se、詩屎 sí の如くで、表記が一定しないが、-e、-i とともに [i] を表わしていることは明かである。

反對に漢字で外國語を寫す場合の用字を見よう。[Kwong 1875] の巻末附録の一「要字撮録」を見ると、me を唔尾 [mi:] で²³、he を希 [hi:] で、geography の最終音節を非 [fi:] で、believe の中間の音節を厘 [li:] で、safety の最終音節を地 [ti:] で、それぞれ寫しているが、これまた同様の傍證である。

以上は十九世紀の粵語音の實態である。ウイリアムスの表記が現實から乖離しているとはいえない。ただしウイリアムス自身もすでに指摘するように、(I) の變化はすでに現れ始めていたのであり、パーカーやボールによって修正された。しかし (III) の變化は十九世紀を通じて顯在化することはなかった。

歐米人の資料に対する一般的評價

十九世紀、歐米の宣教師や商人の中國來航が次第に多くなった。とくに南京條約以降その數は一気に増加する。中國研究の第一歩として、彼らが言語研究に費やした勢力はきわめて大きいものがあり、編纂された辭書、文法、學習書の數は相當數に上っている。今日から見れば、これらは貴重な言語史資料である。ただ資料として用いるために、その正しい性格づけが必要なことはいうまでもない。しかし粵語に関する歐米人の業績については、かなり辛辣な意見もある。たとえば [香坂

²¹ この資料については、別に興味深い點もあり、今後機會を見て詳論したいと思う。

²² 著者は序文中、羊城の唐廷樞と自署するとおり廣州の人である。

²³ 唔を前接するのは、m-音を際立たせるための手段。無い場合もある。

1952] は以下のようにいう。

廣東語研究史上に、大きく現れる西歐人は R. Morrison, S.W. William (sic), W. Lobscheid, E.D. Eitel, J. Dyer Ball 及び廣東語を始めて國際音標符合で表はすに成功した Daniel Jones 等の數人であつて、此等の人々の貢獻は、夫々大きく評價されなければならないが、又その一面、殆どが標準的廣東語 廣州話 を傳えることに失敗している點は、矢張り指摘しておかねばならない²⁴。

香坂氏の主張は引用箇所に續くページに述べられているから、興味のある讀者は就いて検討していただきたいが²⁵、まずヨーロッパ廣東語研究の開祖であるモリソンについて言えば、「著述に當つて、どうも中山縣人を助手として使つた形跡がある。と言ふのは、彼の著作の音は、完全と言って良い程、中山音であつて、これは、歴史語言集刊二十本に趙元任氏が發表した「中山方言」を見ることに依つて、益々はつきりして來た」とある。しかし [趙 1948] によつて實際に中山音の特徴がモリソンに有るか否かを見てみると、決してそんなことはないのである。

趙元任は、中山音の特徴を以下のように概括する²⁶。まず聲母については (1) 廣州の f が母音 u の時、中山では h になる。(2) 廣州では影・疑母が合流し、高母音韻母の場合は聲母ゼロ、低母音韻母の場合は ng となるのに對し、中山では本來の疑母に ng が保存される。一方、影母では絶対に ng が付かない。韻母では、まず (3) 中山には e 母音がなく、この韻母は中山では ia となる。たとえば爹tia。(4) 中山では am,om(ap,op) を區別する、たとえば金 kam、甘 kom。(5) 廣州では o と uo、o:ng と uo:ng、o:k と uo:k を區別するのに、中山では開合を區別しない。たとえば個、過は中山ではともに ko となる。

以上の諸點をモリソンの辭書について具體的に見ると、

(1) 夫、闊は foo、foot であつて、h にはなっていない。(例えば part I の day, narrow の項)

(2) 議 (疑) ee = 衣 (影) ee、嚴 (疑) een = 燕 (影) een、魚 (疑) u = 於 (影)、のように疑母・影母を區別しない。

(3) 爹字が現れないので、なんとも言えないが、同韻の文字は見える。例えば、茄 kay、寫 say、扯、借 tsay、等々。ここでは -ay は [e] を表わす。

(4) 金、甘ともに kum と表記されている (Part 2, kum の項)

(5) 廣光を kwong、講鋼を kong として、また過を kwo、個を ko として明瞭に區別する。

つまり、どれ一つとっても中山音であるという積極的な特徴は見られない。

ここで、もし中山音を用いたとすればどのような特徴が現れるかという例を、實際に見てみよう。[Stedman/Lee 1888] は副題にも銘記してあるように、主としてアメリカ在住の中國人の使用を目的に作られたマニュアルで、その中國音は中山音の影響が濃いと考へられる²⁷。これとても完全に中山音を用いているわけではないものの、中山音が背景にある場合の例を知る材料としてたいへん重要である²⁸。

²⁴[香坂 1952] p.49.

²⁵ただしそこに引用されるウイリアムスの著書の書誌的事項と述べられてある事實については、少なからず疑問がある。

²⁶[趙 1948] p.50.

²⁷序文に、本書で用いた言葉はいわゆる官話ではなく、アメリカ在住の中國人の大多數の出身地である廣州及びその周辺の言語であることを述べたあと、「正書法は基本的にはブリッジマンとウィリアムスの用いたものだが、これらの書物をよく知る人々は、多くの語の發音がしばしば非常に異なっていることに気が付くであろう。しかしここに使用した音は母音も子音もふくめて大部分のニューヨーク在住廣東人による發音なのである」と注意を喚起しているのが注目される。

²⁸ニューヨークの華僑は四邑出身者が最大多數を占め、彼らはいわゆる台山方言を用いていた筈であるが、この書の音を見るとむしろ中山音である。その理由はおそらく台山方言を用いた場合、標準的粵語音との懸隔が甚だしく、この種の書物に用いるには適當ではないという配慮があつたであろう。また外國人との接觸の歴史が長い中山人の言語の影響力の大きさが關係していると思われる [吳 1954] p.3. 實際、英語を善くする人材の多くは當初中山 (香山) 人によつて占められていた。編者の一たる K.P.Lee (步雲李桂攀) もあるいは中山人であつたかも知れない。中山音がアメリカの華僑社會における一種の規範になっていたということも考へられないではない。しかしそれも中山方言そのものではなく、より正確には中山音的色彩の濃い粵語とでもいうべきであろうか。

この資料では、たとえば先ず、合を hop、急を kap として -m 韻尾の開合韻母を区別する。また暗 om の音も見える（モリソンは um）。これは上記 (4) の特徴である。次に、廣と講をとともに kong とし（廣州であれば、廣は kwong、講は kong となるはず）、また過と個をとともに ko とする（廣州は過 kwo、個 ko）のは、上記 (5) の特徴である。ng-で寫される月 ngüt、魚 ngu、熱 ngit、而 ngi、反対に ng-の現れない鹽 im、然 in、雨ü、衣 i などは [詹・張 1987] による限り中山音に一致する。また做を tsu とするのも中山音の特徴である（廣州は tsou）。ただし歡 fun のように、(1) に就いて中山音の特徴を示さない場合もあり、(3) の e 韻も、この資料には寫 sye、茄 k'e のような例が現れているから、これも中山的ではない。しかしモリソンの場合と比べれば、その違いは明かであろう。中山音によったという限りは少なくともこの程度の特徴が現れている必要があると、筆者は考えるが如何であろうか²⁹。

香坂氏は次いでウイリアムスについて言及し、「同書（『分韻撮要』）は、著者が自ら順徳人と言っている如く、全く順徳音で各漢字の音を決定しているのである。これを William(sic) が迂闊にも、利用して、廣東方音を決定しているのである」というが、それが一種の濡れ衣であるのはすでに説いたから、ここには繰り返さない。いずれにせよ香坂氏の議論は、歐米人の業績に對して必ずしも正當な評價を與えているとは言い難いのである。筆者はこの種の見解には賛成し得ない。モリソンにせよウイリアムスにせよ、彼らはすべて省城の言語の記述を目指したのであって、それ以外の何ものでもない、と筆者は考える³⁰。そこに多少の方言的要素が入り込むことは場合によっては如何ともし難い。しかしこの種の歐米人によって残された辭書や語學書を一概に方言と決めてかかり、粵語資料としての正しく利用されていない感があるのは憂慮すべきことである。

おわりに

小論では、粵語における止攝開口字の母音推移を歐米人の表記を通して観察してみたのである。この変化は、近代粵語が経験した高母音の複母音化 (diphthongization) という大きな流れの一環であった。したがってこの複母音化は止攝にのみ止まらない。同じように [y] [œy]、[u] [ou] も起こっている。歐米人によるアルファベット表記は、この場合も、それを確認する上で重要な資料となる。ところで [李 1994] では、この母音推移をこともなげに、さも當然であるかの如く結論づけている³¹。結論そのものには筆者も賛成である。しかしそのことを言うためには、踏むべき手続きとして必要な資料の位置づけとその正しい解釋とが必要であろう。小論で贅言を費やしたのにはそれなりの理由があるのである。

引用文獻

[Ahock 1823-25]: *Die Epistel S. Pauli an d. Römer*, ins Chinesische übersetzt (mit Aussprachebezeichn. u. deutschen Text) von dem Chinesen Ahock aus Canton (zu Halle 1823-25). Manuscript kept in the Vatican Library. 152p.

²⁹ 香坂氏がジョーンズの書物 [Jones/Woo 1912] について、「順徳音による」というサブタイトルを附しておいたほうが無難だ、というのも、その意味で些か言い過ぎではないかと思われる。同書の音聲記述には i 以外に j が現れるなど、インフォーマントの胡炯堂氏はいかにも順徳出身である可能性が高い。しかし彼は極力標準的な粵語を語ろうとしているという点だけは間違いない。順徳の特徴が時に現れるというだけでは、「順徳音による」とするわけにはいくまい。

³⁰ たとえばウイリアムスなどはすでに方言の差異に注意を拂っていたのであって、[Williams 1856]p.324, ngi 音の條下に注して、「ngi 音はマカオでしばしば聞かれるが、廣東では i が用いられる」というような指摘を行っている。この種の注意は他にも見いだせる。必ずしも中國韻書に盲従したわけではないのである。その意味で、すでに早く J.F.Davis がその貿易用語集 [Davis 1824] 巻頭の注記に、「廣東の方言には全く一定したものがなく、廣州とマカオのあいだでも本質的な違いがある」と言って、廣州とマカオ方言の相異に言及しているのは注意されてよい。

³¹ [李 1994] p.174-5. 李氏はこの複母音化を「韻尾的繁衍」と稱している。

- [Ball 1904]: J. Dyer Ball. *Cantonese Made Easy*, revised and enlarged third edition, Singapore / Hong Kong / Shanghai / Yokohama, 1904.(First edition published in 1883.)
- [Bridgman 1839]: Elijah Coleman Bridgman, *A Chinese Chrestomathy in the Canton dialect*, Macao, 1839.
- [Chalmers 1855]: John Chalmers, *Chinese Phonetic Vocabulary, containing all the most common characters, with their sounds in the Canton dialect*(初學粵音切要), Hong Kong, 1855.
- [Cowles 1965]: Roy T. Cowles, *The Cantonese speaker's dictionary* (粵語辭淵), Hong Kong, 1965.
- [Cowles 1990]: Roy T. Cowles, *A pocket dictionary of Cantonese*(廣州話袖珍字典), Third Impression of the Second Edition, Hong Kong, 1990 (First edition published in 1914).
- [Davis 1824]: John Francis Davis, *A Commercial Vocabulary, containing Chinese words and phrases peculiar to Canton and Macao, and to the Trade of those places*, Macao, 1824.
- [Devan 1847]: Thomas T. Devan, *The Beginner's First Book in the Chinese Language (Canton Vernacular)*,
- [Eitel 1877]: Ernest John Eitel, *A Chinese Dictionary in the Cantonese Dialect*, Hong Kong, 1877.
- [Fok 1990]: K.C. Fok, *Lectures on Hong Kong History: Hong Kong's Role in Modern Chinese History*, Hong Kong, 1990.
- [Jones/Woo 1912]: Daniel Jones and Kwing Tong Woo(胡炯堂), *A Cantonese Phonetic Reader*, London, 1912. (邦譯：魚返善雄『廣東語の發音』、東京、文求堂、1932年)
- [Kwong 1875]: Kwong Ki-chiu (鄭其照), *English and Chinese Dictionary, compiled from Different Authors, and enlarged by the Addition of the last four part*(字典集成), 2nd edition, Hong Kong, 1875. (First edition published in 1868.)
- [Legge 1941]: James Legge, *A lexilogus of the English, malay, and Chinese Languages; comprehending the Vernacular idioms of the last in the Hok-keen and Canton Dialects*, Malacca, 1841.
- [Lobscheid 1866-69]: William Lobscheid, *English and Chinese Dictionary, with the Punti and Mandarin Pronunciation*, Hong Kong, 1866-69.
- [Meyer/Wempe 1947]: Bernard F. Meyer and Theodore F. Wempe, *The Student's Cantonese-English Dictionary*, Third Edition, New York, 1947 (First edition published in 1935).
- [Morrison 1928]: Robert Morrison, *Vocabulary of the Canton dialect* (廣東省土話字彙), Macao, 1828.
- [Parker 1880]: Edward Harper Parker, Canton Syllabary, in *The China Review*, Vol.VIII (1879-80), p.363-382.
- [Stedman/Lee 1888]: T.L. Stedman and K.P. Lee, *A Chinese and English Phrase Book in the Canton Dialect. or Dialogues on Ordinary and Familiar Subjects for the Use of the Chinese resident in America, and of Americans desirous of learning the Chinese Language; with the Pronunciation of each word indicated in Chinese and Roman Characters*(英語不求人), New York, 1888.
- [Williams 1842]: S. Wells Williams, *Easy Lessons in Chinese, or Progressive Exercises to facilitate the Study of that Language, especially adapted to the Canton Dialect*(拾級大成), Macao, 1842.
- [Williams 1844]: S. Wells Williams *English and Chinese Vocabulary in the Court dialect*(英華韻府歷階), Macao, 1844.
- [Williams 1856]: S. Wells Williams, *A Tonic Dictionary of the Cantonese Language*(英華分韻撮要), Canton, 1856.
- [黃 1941]: 黃錫凌『粵音韻彙』、中華書局、1941年。
- [李 1994]: 李新魁『廣東的方言』、廣東人民出版社、1994年。
- [唐 1862]: 唐廷樞『英語集全』六卷、同治元年(1862)廣州緯經堂刊本。

- [吳 1954]：吳尚鷹『美國華僑百年紀實』、香港、1954年。
- [趙 1948]：趙元任「中山方言」、『歷史語言研究所集刊』第二十本、1948年、pp.49-73。
- [香坂 1952]：香坂順一「廣東語の研究 モリソンから趙元任へ」、『人文研究』（大阪市立大學）3-3、1952年3月、pp.35-63。
- [詹・張 1987]：詹伯慧・張日昇（主編）『珠江三角洲方言字音對照』（珠江三角洲方言調查報告之一）、新世紀出版社、1987年。